

(原文 URL : <https://mailchi.mp/theibta/rculorsyeg-2299366?e=940563a4b2>)

IBTA e-News 国際脳腫瘍ネットワーク 月刊ニュースレター 2022年4月号

【トップニュース】

Going Grey in May

5月は脳腫瘍啓発月間として、各国の脳腫瘍団体がさまざまな公開イベントや募金活動を実施する。脳腫瘍啓発月間(Brain Tumour Awareness Month)」で検索するか、最寄りの脳腫瘍団体に問い合わせると、活動内容や参加方法について詳しく知ることができる。IBTAの脳腫瘍患者擁護団体のオンラインディレクトリは[こちら](#)。

ウクライナに関する最新情報

IBTAは、欧州がん機関 (ECO) および米国臨床腫瘍学会 (ASCO) と緊密に連携して、[「特別ネットワーク：ウクライナ戦争ががんに与える影響」](#)の参加機関として活動を続けている。(IBTAが運営委員を務める) 特別ネットワークでは、紛争に巻き込まれたウクライナのがん患者を支援するため、情報、経験、人脈を共有するコミュニティを作った。このネットワークは、www.onco-help.orgで各国の言語によるリソースやリンクの情報ハブを提供し、他の組織がウクライナの患者のために行っている活動も紹介し、広めている。また、この特別ネットワークは、ウクライナのがん患者や治療・支援者が現在直面している数多くの課題に取り組んでいる。

IBTAでも、助けを求めてきた少数のウクライナ人家族を直接支援してきた。IBTAニュースの読者の皆様には、ウクライナ人の脳腫瘍患者や医療従事者のためのリソースページへのリンクを、ご自身のウェブサイトにも貼っていただきたい。リンク先は、www.theibta.org/ukraine

上衣腫啓発デー

上衣腫啓発デーは、上衣腫の10種類の分子グループを示し、この疾患の多様性に注意を喚起するために5月10日に開催される。2012年から毎年開催されている世界的なアドボカシーイベントで、正確な診断の重要性と、より良い標的治療の緊急の必要性を強調するものである。また、上衣腫啓発デーは、この稀な腫瘍について、そして、診断方法の改善・より良い標的治療の開発・患者の転帰を改善する臨床研究の差し迫った必要性について、一般の人々の認識を高めることを目的としている。今年の上衣腫啓発デーの詳細は、[こちら](#)。

米国脳腫瘍協会 (ABTA) 治療施設ガイドを公開

米国脳腫瘍協会 (ABTA) は、米国内の80以上の脳腫瘍治療施設のデータベースである独自の「脳腫瘍治療施設ガイド」を公開したと発表した。患者や介護者は、年間治療患者数・提供されている技術・専門的な治療・利用できる支援サービスなど、各治療プログラムの詳細情報にアクセスすることができる。治療施設の掲載基準は、脳腫瘍領域で活動する医療従事者や患者支援団体によって検討・審査されたものである。ABTAは、患者とその家族が、個々の治療や介護について、より多くの情報を得た上で意思決定できるように、このサービスを作成した。脳腫瘍治療施設ガイドとその他の資料については、www.abta.orgまで。

「脳腫瘍と私」 - IBTAのポッドキャストシリーズ、エピソード5を開始

IBTAは、ポッドキャストシリーズの第5話「脳腫瘍と私-インスピレーションの旅路・私の物語・希望」の配信を開始したことをお知らせする。

米国ノースカロライナ州出身のMiranda Shipmanは、27歳のときに非常に珍しいタイプの脳腫瘍であることを期せずして告げられた。しかし、それは彼女の人生を大きく変える出来事であった。このエピソードでは、MirandaがレポーターGraham Seamanに最初の診断の知らせにどう対応したかや、彼女の命を救った手術について語っている。その後、腫瘍が再発したことを知ったときのこと、そして今どのように未来と向き合っているのか、Mirandaは語っている。「脳腫瘍と私」は、[Appleポッドキャスト](#)、

[Googleポッドキャスト](#)、[Spotify](#)、[CastBox](#)、[Anchor](#)およびIBTAウェブサイトwww.theibta.org/podcastで視聴可能。

神経腫瘍学における遠隔診療利用の際の実践的な指針を発表

[Neuro-Oncology Practice](#)誌に掲載された論文では、医療従事者が遠隔診療を利用して脳腫瘍患者をケアする際の、実践的な指針が提示された。COVID-19の大流行により、ほとんどすべての専門領域で遠隔診療が拡大した。この論文は、遠隔診療の現状を取り上げ、遠隔診療を行う際の実践的なヒントを提供し、神経腫瘍学の診療にバーチャルケアを統合する際の推奨事項を提案している。また、著者らはさらに、遠隔診療をいつ使用し、いつ使用しないか、バーチャル診療をどのように行うか、誰に会うか、神経腫瘍学における遠隔診療の顕著な特徴、今後の技術革新についても、実践的な提案を行っている。

All.Can at five - 年次報告書を公開

All.Canは、患者にとって大切なことに焦点を当て、がん治療の効率化を促進するために活動している国際的なマルチステークホルダー型非営利組織である。IBTAは、All.Canの創設メンバーであることを誇りに思っている。All.Canはこのほど、「[All.Can at five years \(訳注：5年目のAll.Can\)](#)」と題した2021年度の年次報告書を発表した。この報告書では、All.Canの5年間の成果とマイルストーンを紹介しており、主なハイライトは、All.Can政策レポート（[より良い診療のためのデータ活用](#)）の発表と、[All.Canグローバルサミット](#)の成功の2点である。All.Canは18カ国で活動しており、患者支援・医療従事者・産業界・学会・研究者を代表する30の組織や個人が加盟している。

【治療関連ニュース】

サハラ以南のアフリカにおける脳腫瘍患者のケアに関するスコーピングレビュー

新しい[スコーピングレビュー](#)によると、サハラ以南のアフリカ（SSA）の神経腫瘍医は、エビデンスに基づくケアを提供するための作業負荷が高いことを報告している。しかし、これらの報告は、この地域における推定疾病負担とは著しく異なっている。このレビューの目的は、発表された文献に基づきサハラ以南のアフリカ（SSA）の脳腫瘍の状況をマッピングすることで、この不一致の理由をより深く理解することである。

パンデミック時の低・中所得国の小児がん患者の死亡リスクが高いとの研究報告

[BMJ Open](#)誌に掲載された研究結果によると、COVID-19パンデミックの際、低・中所得国に居住する小児がん患者は、高所得国に居住する患者に比べて、あらゆる原因による死亡リスクが高かったことが明らかになった。さらに、これらの患者では、治療の遅れ・中断・変更があり、パンデミックは世界中の医療システムの格差を悪化させた可能性があることが示唆された。研究者らは、2020年3月から12月にかけて

世界の91病院のデータを調査し、脳腫瘍を含むさまざまな種類のがんを持つ18歳未満の患者1660人を対象とした。[続きを読む](#)。

画期的な脳腫瘍治療プログラムにより英国国民保健サービス（NHS）の治療に革命が起きる可能性

ケンブリッジにあるアデンプルック病院の脳腫瘍患者は、ゲノミクスとがん研究における最新の技術革新を用いた個別化治療の恩恵を受けることができるようになる。英国国民保健サービス（NHS）の脳腫瘍患者約225名に対して、包括的な分子診断と遺伝子配列決定結果に基づく個別化治療計画が提供される予定である。Minderoo Precision Brain Tumour Programmeは、Minderoo Foundation、The Tessa Jowell Brain Cancer Mission、ケンブリッジ大学病院（CUH）NHS財団トラスト、ケンブリッジ大学の英国王立がん研究基金（Cancer Research UK）ケンブリッジセンターおよびIllumina社のパートナーシップによって運営されている。その目的は、最終的に全生存期間を延長する新しい標的治療を提供することである。この計画は、最終的には全国に拡大することが期待されている。[続きを読むはこちら](#)。

【研究ニュース】

ブリガム・アンド・ウィメンズ病院の研究者らによる研究で、神経膠腫の起源に新たな知見、新たな治療標的が示唆

マイクロRNAなどの制御RNA分子は、脳腫瘍において重要な役割を担っている可能性がある。マイクロRNA-10b（miR-10b）として知られる特定のマイクロRNAは、脳の正常細胞では発現が抑制されているが、高悪性度神経膠腫の90%以上で豊富に存在するようになる。神経膠腫の中でも最も悪性度の高い膠芽腫（GBM）は、このマイクロRNAに依存しているようで、これがないとがん細胞は死滅する。したがって、miR-10bは、膠芽腫（GBM）の新規精密医療の有望な標的となる。この新規研究で、ブリガム大学の研究者らは、このマイクロRNAがどのようにしてGBMで活性化されるのかを明らかにした。miR-10bとその近傍にあるいくつかの遺伝子が神経膠腫で共通して発現していることが発見されたが、その理由を説明するような共通の遺伝子変化は見られなかった。研究チームは、正常およびがん化した細胞と組織の詳細なエピジェネティック解析を行い、クロマチンのトポロジー再編成を伴う新たなメカニズムを発見し、2種類の長鎖の制御RNAが関与していることを明らかにした。これらの発見は、マイクロRNAなどの遺伝子がどのようにがんの成長を促進するようになるのかを説明し、これらのメカニズムを標的とする可能性を指摘していると考えられる。[続きを読む](#)（アブストラクト）。

がん細胞の「スイッチを切る」ことで増殖を抑える膠芽腫治療の可能性

[Oncogene](#)誌に掲載された新しい研究で、特定の細胞タンパク質を標的とする阻害剤が発見された。この研究は、分化療法に着目したものである。分化療法とは、薬物によって悪性細胞をより良性な状態に「切り替える」方法である。これにより、よりゆっくりと細胞が分裂、増殖するため、腫瘍の増殖が制限される。「この研究では、「キナーゼ」と呼ばれるタンパク質群に作用するさまざまな薬剤を検査した。その結果、特定のタンパク質（PDGFR）を標的とし、下流の標的の発現を変化させる阻害剤を同定した。つまり、膠芽腫がん細胞や膠芽腫がん幹細胞をより良性な神経細胞様の細胞に切り替えることが可能になる。これにより、最終的にその増殖能と浸潤能を低下させることができる。また、科学者らは、この特定の薬剤による治療が、膠芽腫の治療に用いられる主要な化学療法薬であるテモゾロミド（TMZ）の効果を改善することを、in vivo試験で示した。[続きを読む](#)。

髄膜腫患者で不安とうつが増加していることが研究で判明

BMC Psychology誌に掲載された「頭蓋内髄膜腫患者における不安とうつ：混合研究法による分析」と題する研究では、髄膜腫患者の精神的負担を調査した。外科的切除を受けた患者と経過観察中の患者という2つの異なるグループを調査した。軽度から重度の不安症状の有病率は、外科的治療を受けた患者では28.6%、観察中の患者では50%であることがわかった。また、軽度から重度のうつ症状の有病率は、外科的治療を受けた患者では7.14%であったのに対し、経過観察中の患者では6.25%であった。[続きを読む](#)。

膠芽腫に免疫療法を用いた非盲検第3相CheckMate 498試験の結果

Neuro-Oncology誌に掲載された第3相CheckMate 498試験の結果、ニボルマブ（NIVO）+放射線療法による治療は、膠芽腫における全生存期間の改善という主要評価項目を満たさないことが示された。本試験では、初発膠芽腫と診断され、MGMTプロモーターが非メチル化されている患者560名が対象であった。ニボルマブと放射線療法との併用が、テモゾロミドと放射線療法を併用する膠芽腫の標準治療と比較された。また、本試験の研究者らは次のように結論付けた：「この試験では、ニボルマブがより安全であるという兆候は検出されませんでした」。[続きを読む](#)。

神経腫瘍学におけるコアアウトカムセット開発の機会と課題

コアアウトカムセット（cos）とは、特定の健康状態や健康領域について合意され標準化されたアウトカムのグループで、臨床試験によって報告されるものである。cosは、臨床研究デザインに不可欠なものとして、ますます認識されるようになってきている。神経腫瘍学における「コアアウトカムセット」開発の機会と課題に関する論文では、脳腫瘍の臨床試験に特化したcosの作成について取り上げている。[続きを読む](#)。

新しい併用療法による有害事象を予測する人工知能（AI）モデルを開発

4月8日から13日までニューオーリンズで開催された米国がん学会（AACR）年次総会2022で発表された[アブストラクト](#)で、新しい併用療法から生じる副作用を予測できる可能性のある人工知能モデルを報告した。併用療法は、効果を最大化し、治療抵抗性の可能性を最小化することを目的として、多くのがん種に対して臨床医によってますます使用されるようになってきている。しかし、新薬や新しい併用療法を試験する臨床試験では、試験する治療レジメン以外に患者が服用する可能性のある薬剤を考慮することはほとんどない。この問題に対処するため、異なる薬剤の効果の関係を、病気の状況との関連において理解するための新しい人工知能のアプローチを開発した。[続きを読む](#)。

メチオニン代謝と小児脳腫瘍

Nature Cancer誌に掲載された研究によると、UPMCピッツバーグ小児病院の研究者らは、H3K27M変異を有するびまん性正中神経膠腫（DMG）が、人間が食事から摂取する必須アミノ酸であるメチオニンに特異的に依存していることを発見したという。このメチオニン代謝を特異的に標的とした薬剤を開発したところ、がん細胞の増殖が劇的に抑制された。H3K27M変異型びまん性正中神経膠腫（DMG）を持つマウスにメチオニン制限食を与えたある実験では、寿命が50%近く延長されたという。研究チームは今後、メチオニン代謝を標的とした薬剤を患者に投与する臨床試験の提案書を作成する予定である。[続きを読む](#)。

脳に転移したがん患者に対する放射線治療を改善する方法を新たに発見

スペイン国立がん研究センター（CNIO）の科学者らは、脳に転移したがん細胞（脳転移）の放射線治療に対する耐性のメカニズムを発見した。この放射線治療に対する耐性がなぜ生じるのか、またそれをどのように防ぐのかを理解することで、進行したがん患者の生存率を向上させるより効果的な治療法につながることを期待される。脳腫瘍のモデルマウスを用いた本研究は、[Nature Medicine](#)誌に掲載された。こ

の研究により、患者が放射線治療に反応するかどうかを示す、簡単な血液検査で検出可能な新規バイオマーカーが明らかになった。また、血液脳関門を通過して放射線治療に対する耐性を逆転させるRAGE阻害剤と呼ばれる特異的なタイプの薬剤も同定された。現在、これらの知見を患者で検証するための臨床研究が進められている。続きを読むには[こちら](#)と[こちら](#)。

脳腫瘍におけるゲノム検査の活用が臨床転帰の改善につながると研究者らが発表

[Neuro-Oncology](#)誌に掲載された38名の患者を対象とした研究では、研究者らがゲノムプロファイリングと呼ばれる高度な実験技術を用い、神経膠腫患者の臨床的影響を判断し、転帰を予測した。「本研究は、ゲノムプロファイリングが、生物学的に一致した過去の患者コホートと比較して、より積極的な患者管理をもたらし、最終的に臨床転帰を改善したことを示しています」と、上級著者のDavid Solomon医師は述べている。研究者らは次のように結論づけた：「これらの結果は、グリア細胞性新生物を正確に分類するために、ゲノムまたはエピゲノムプロファイリングを常用することを支持するものである。これは、これらのアッセイが、診断分類を改善するだけでなく、臨床転帰を改善できるより適切な患者管理につながることで決定的となるからである。 [続きを読む](#)。

【国際的脳腫瘍コミュニティのニュース】

小児視床下部・下垂体腫瘍に関する調査

オランダのユトレヒトにあるウィルヘルミナ小児病院の小児科医とともに、オランダ下垂体財団が調査を行っている。この調査は、Endo-ERN（欧州レファレンスネットワーク）という、希少内分泌疾患に関するERNの傘下で行われている。本調査は、小児期（診断日が19歳まで、この年齢までに診断された成人を含む）に頭蓋咽頭腫・低悪性度神経膠腫・胚細胞腫瘍などの脳の視床下部/下垂体領域の腫瘍と診断された、または治療を受けた患者を対象としている。本調査は14カ国語で実施されており、本調査の詳細については[こちら](#)。

【イベント／学会ニュース(抜粋)】

※患者向けイベントは省略 学会ニュースのみ抜粋

現在のCOVID-19パンデミックの影響で、世界中の多くの対面式の会議や学会が中止、延期、またはバーチャルイベントに変更されている。私たちはこうしたニュースに対応するよう最善を尽くしているが、予定されている会議の状況に関しては、必ず会議主催者に確認のこと。

2022年6月

[欧州小児腫瘍学会脳腫瘍会議](#)

2022年6月11日-12日 ドイツ ハンブルグ

[第20回 小児神経腫瘍学国際シンポジウム\(ISPNO 2022\)](#)

2022年6月12日-15日 ドイツ ハンブルグ

[第15回 国際定位放射線手術学会大会](#)

2022年6月19日-23日 イタリア ミラノ

[脳腫瘍免疫学会議2022：小児脳腫瘍：起源、疫学と分類](#)

2022年6月20日-22日 フランス リヨン 現地参加（バーチャル参加方法は検討中）

[英国神経腫瘍学会年次大会2022 \(BNOS2022\)](#)

2022年6月22日-24日 英国 リバプール

[脳腫瘍ミーティング2022：生物学から治療まで](#)

2022年6月22日-24日 ポーランド ワルシャワ

2022年7月

[がん転帰の改善とリーダーシップに関するコース：欧州腫瘍学学校\(ESO\)、欧州がん協会\(ECO\)、Sharing progress in cancer care \(SPCC\) 共催](#)

2022年7月7日-9日 ポーランド ワルシャワ および オンライン

2022年8月

[中枢神経の臨床試験と脳転移（神経腫瘍学会\(SNO\)、米国臨床腫瘍学会\(ASCO\)共催）](#)

2022年8月12日-13日 カナダ トロント

2022年9月

[後頭蓋窩学会-第1回世界大会](#)

2022年9月9日-11日 英国 リバプール

[第16回欧州神経腫瘍学会\(EANO\)大会](#)

2022年9月15日-19日 オーストリア ウィーン

2022年11月

[米国神経腫瘍学会 第27回年次学術会議](#)

2022年11月16日-20日 米国 フロリダ州タンパ

2022年に開催される脳腫瘍患者やその擁護団体によるイベントまたは学術会議（バーチャルか対面かは問わず）を企画している方、ご存知の方、または上記イベントの変更にお気づきの方は、kathy@theibta.orgまで、[イベントページ](#)に掲載可能。

IBTAウェブサイトの[会議ページ](#)で、今後の学術会議やイベントの最新情報を確認のこと。

翻訳： 会津 麻美、伊藤 彰/JAMT（ジャムティ）翻訳
チーム

監修： 夏目 敦至/名古屋大学未来社会創造機構・特任教授

河村病院・脳神経外科・部長

IBTA（国際脳腫瘍ネットワーク）について

私たちについて 国際脳腫瘍ネットワーク（The International Brain Tumour Alliance：IBTA）は2005年に設立されました。各国の脳腫瘍患者や介護者を代表する支援、提唱、情報グループのネットワークであり、脳腫瘍の分野で活躍する研究者、科学者、臨床医、医療関係者も参加しています。詳細は www.theibta.org をご覧ください。

ご意見をお聞かせください。IBTAコミュニティで共有したいニュースがあれば、ぜひお聞かせください。宛先：chair@theibta.org 月刊ニュースレターやホームページを通じて、ご購読者の皆様にご覧いただけるだけの情報を中継していく予定です。メールニュース記事の選択は、編集者の裁量で行われます。

Copyright © 2020 The International Brain Tumour Alliance, All rights reserved.
無断複写・転載を禁じる。

(免責事項) 国際脳腫瘍ネットワーク (IBTA) は、e-News (あるいはIBTA向け、またはIBTAに代わって作成されニュース内でリンクを提供しているすべての資料、報告書、文書、データ等) に掲載される情報が正確であるよう尽力しています。しかし、IBTAはe-News内の情報の不正確さや不備について一切の責任を負いません。また、その情報やリンク先のwebサイト情報など、第三者の情報の不正確さに起因する損失や損害についても一切の責任を負いません。このe-Newsに掲載される情報は教育のみを目的としたものであり、医療の代替となるものではなく、IBTAウェブサイト上の情報は、医療上のアドバイスや専門的サービスを提供することを意図したものではありません。医療や診察については、主治医にご相談ください。臨床試験のニュースを掲載することは、IBTAの特定の推奨を意味するものではありません。IBTA e-Newsからリンクされている他のウェブサイトは、IBTAは管理していません。したがって、その内容については一切責任を負いません。IBTAは読者の便宜のためにニュース内でリンクを提供しているものであり、リンク先のウェブサイトの情報、品質、安全性、妥当性を検証することはできません。IBTAのプロジェクトに企業が協賛することは、IBTAが特定の治療法、治療レジメン、行動の推奨を意味するものではありません。(スポンサーの詳細については、スポンサーシップ・ポリシーをご覧ください)。e-Newsに掲載されている資料の見解や意見は、必ずしも国際脳腫瘍ネットワークのものではない場合があります。